

# 自分の学びを実感し、未来を拓く子どもの育成

研究副主題

「手応え」でつなぎ、「捉え直し」で深まる学び

## 1. 研究主題について

未来を拓く

「未来を拓く」、現在の世の中に最も求められていることであろう。地球温暖化に代表される気候変動に伴う世界規模の環境問題、今もなお続く世界各地での戦争や紛争、そして、個々人の生活のみならず社会や経済活動の在り方を一変させた新型コロナウイルスの猛威。世界は今、答えの見えない問題状況で埋め尽くされているといつても過言ではない。

こうした問いに対する正しい答えは、どこかに用意されているものではないし、誰かが教えてくれるものでもない。ゆえに、今後の未来を担う子どもたちは、正真正銘、自分たちの手で未来を拓いていかなければならない。

これから時代を生き抜くために身に付けさせたい力

[Society5.0<sup>1</sup>](#)を標榜した急速な技術革新等がもたらすパラダイムシフトによって、既に私たちの生活は大きく変化している。その中では、価値観は一層多様化し、これまで「当たり前」であったことすらも次々と変化している。

慶應義塾大学医学部教授の[宮田裕章<sup>2</sup>](#)氏は、これからの時代はDX（デジタルトランスフォーメーション）によって、一人一人の価値を捉えて、個別化と包摂を実現する体験を提供できるようになると述べている。これにより、[Jeremy Bentham<sup>3</sup>](#)が提唱した「画一的な価値観の下でできるだけ多くの人の幸せを実現する～The Greatest Happiness of The Greatest Number.（最大多数の最大幸福）」を超えて、「何を幸福と思うか」という価値観の多様さまでも尊重される「The Greatest happiness of The Greatest "Diversity".（最大多様の最大幸福）」の実現が可能になるという。

つまり、個別化や多様化が一層進展する未来社会において一人一人が本当に幸せな世界を創り上げていくためには、画一的な既存の価値観から脱却し、「自分にとっての幸福」を見いだすことが重要で、その実現に向けた行動を起こすことが一人一人の「未来を拓く」ことにつながるのだと考えられる。

<sup>1</sup> 日本国政府が提唱する未来社会のコンセプト。科学技術基本法に基づき、5年ごとに改定される科学技術基本計画の第5期キャッチフレーズとして登場。令和3年3月26日に閣議決定された第6期科学技術・イノベーション基本計画ではSociety 5.0の未来社会像を「持続可能性と強靭性を備え、国民の安全と安心を確保するとともに、一人ひとりが多様な幸せ（well-being）を実現できる社会」と表現している。

<sup>2</sup> データサイエンス、科学方法論を専門とする日本の研究者。データサイエンスなどの科学を駆使して社会変革に挑戦し、現実をより良くするための貢献を軸に研究活動を行うことをテーマに活動している。

<sup>3</sup> 英国の哲学者・経済学者・法学者であり功利主義（人々の幸福を最大化することを目指す倫理学）の創始者。

## 学びの実感

同時に、多様化する価値観を互いに認め合うことも忘れてはいけない。それは、自分との違いを尊いものとして受け入れることもある。違いとは、自分が持ち合っていない独自性であり、その中に存在する価値を見出し、受け入れて生きることは、他者にとっての「未来を拓く」ことにもつながる。

これから時代を生きる「未来を拓く」人間として、子どもたちには「どこかに用意された答えを探す力」ではなく、「納得のいく自分の答えを創り上げる力」を身に付けてほしいと考える。

この力は決して「新しい能力観」ではない。自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれに思い描く幸せを実現するための力として、これまで長く我が国の教育において大切にされている「生きる力」そのものである。

この「生きる力」を、子どもたちが確実に身に付けていくには、一人一人が「自分の学びを実感すること」が欠かせない。元文部科学省初等中等教育局主任視学官の嶋野道弘<sup>4</sup>氏の言葉を借りるならば、「学びの実感」は、この「生きる力」を身に付ける過程も含めた「学び」という営みを生き生きと、ありありと感じることである。

私たちは、生活科や総合的な学習の時間において、今まで大切にしてきたように、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を実現し、子ども自身が「自分の学びの実感」を確かに積み重ねられるようにすることが重要である。そうすることで、子どもに「納得のいく自分の答えを創り上げる力」を育んでいくことが可能となる。

生活科や総合的な学習の時間は、今や教育課程の中核をなすものとして各学校のカリキュラムに位置付けられているが、その理由は、教科や校種等を横断した連携・接続の進展や、探究モードへの急速なシフト等からも明らかである。

子どもがこれまでの生活経験の中で獲得してきた見方・考え方を働かせて、自分の思いや願いを実現する生活科。答えのある教科等の系統的な学びで身に付けた知識や思考を、各教科等の見方・考え方を働かせて横断的・総合的な課題の探究に活用・発揮していく総合的な学習の時間。両者で育成される資質・能力は、先に述べた「納得のいく自分の答えを創り上げる力」に他ならない。

こうしたことからも、これまでの「大看板」を変わらず大切にしていくことが肝要である。そこで、研究主題を引き続き以下のように設定する。

<研究主題>

**自分の学びを実感し、未来を拓く子どもの育成**

<sup>4</sup> 元文部科学省主任視学官、元文教大学教育学部教授。元日本生活科・総合的学習教育学会会長。生活科・総合的な学習の時間の創設に関わり、以来、子どもの学びに基軸を置き、その研究と教育の活性化に向けて現在も活躍中。札幌市・北海道とのつながりも深い。

## 手応え

### 2. 研究副主題について

生活科や総合的な学習の時間における「具体的な体験の必要性」については、今さら解説するまでもない。身近な人・もの・ことに対して、直接働きかけることにより、その働き返しとして、心の動きと共に、子どもは様々な「手応え」を得ることができる。その手応えは、自分との関わりで対象を捉えた「確かな認識」や「活動への意欲」となる。このような生活・総合の原理に立ち返ると、学びを実感するためには、指導者として手応えをどう捉えるかが重要となろう。

生活科及び総合的な学習の時間の学習指導要領解説には、以下のような「手応え」に関する記載がある。

- 思いや願いを実現する過程において、自分自身の成長に気付くことや、活動の楽しさや満足感、成就感などの手応えを感じることが、一人一人の意欲や自信となっていく。この意欲や自信が、自らの学びを次の活動やこれからの生活に生かしたり、新たなことに挑戦したりしようとする姿を生み出していくのである。
- こうした気付きの質の高まりは、満足感、成就感、自信、やり甲斐、一体感などの手応えとなり、次の体験への安定的で持続的な意欲につながっていくことになる。生活科においては、気付きの質の高まりが深い学びであると捉えることができる。

[\(学習指導要領（平成29年告示）解説 生活科編\)](#)

- 事象を捉える感性や問題意識が揺さぶられて、学習活動への取組が真剣になる。身に付けた知識及び技能を活用し、その有用性を実感する。見方が広がったことを喜び、更なる学習への意欲を高める。概念が具体性を増して理解が深まる。学んだことを自己と結び付けて、自分の成長を自覚したり自己の生き方を考えたりする。
- こうして探究的な学習に主体的・協働的に取り組む中で、互いの資質・能力を認め合い、相互に生かし合う関係が期待されている。また、探究的な学習の中で児童が感じる手応えは、一人一人の意欲や自信となり次の課題解決を推進していく。

[\(学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編\)](#)

※下線はいずれも研究部による

## 学びにおける 三つの 「手応え」

これらは解説において「学びに向かう力、人間性等」や「学習指導の特質（生活科）」の項目に記された文言である。つまり、「一人一人の意欲や自信」という側面から見た「学びに向かう力、人間性等」は「手応え」を感じることで育まれ、その「手応え」は、生活科では気付きの質が高まる過程で、総合的な学習の時間では探究的な学習、異なる多様な他者と協働して取り組む学習活動の過程において実感するものと理解できる。

そこで、研究主題「自分の学びを実感し、未来を拓く子どもの育成」に「手応え」を切り口にしてアプローチするために、生活科や総合的な

学習の時間の学習における活動過程で子どもたちに感じてほしい手応えを、次の三つに整理した。

①  
問い合わせの解決に対する手応え

一つ目は、自分で立てた問いを、自分で解決することに対する「手応え」である。生活科では一人一人の思いや願いの実現に向けた文脈で生まれる問い合わせを、また総合的な学習の時間では探究の文脈の中に現れる切実な問い合わせを、子ども自身が多様な他者と協働して解決していくことで、手応えは熱を帯び、さらに確かな手応えへと変容していく。

②  
学習の調整に対する手応え

二つ目は、自ら学習を調整することに対する「手応え」である。資質・能力の柱の一つ「学びに向かう力、人間性等」における評価の観点「主体的に学習に取り組む態度」では、「粘り強さ」と「学習の調整」<sup>5</sup>の二つの側面の評価が鍵となる。また、令和3年1月の中教審答申で示された「令和の日本型学校教育」の中で定義された「個別最適な学び」として、一人一人の学びの個性化も重要視されている。自らの学習を調整する力を高め、個性を学びに反映させていくには、教師が敷いた学びの道筋を辿るだけではなく、自ら見通しをたてて自らの意思で道を創っていくこと、そしてその道を歩んだことに対する学びの「手応え」を自分のものとすることが肝要である。

③  
自分の伸びに対する手応え

三つ目は、自分の力の伸びに対する「手応え」である。活動を通して、自分に資質・能力が身に付いたという「手応え」を感じられれば、自己有能観や自己肯定感も自ずと高まってこよう。

このように、「手応え」という切り口で子どもの学びを捉え直していくことは、「学習指導要領の構造化を進めるに当たっての諸論点について」において構造化され触れられている4つの要素

- 初発の思考や行動を起こす力・好奇心 ○学びの主体的な調整
- 他者との対話や協働 ○学びを方向付ける人間性

との関連も改めて認識できるとともに、生活科及び総合的な学習の時間で実現したい子ども像や授業像が明らかになってくる。

こうした「手応え」に着目して実践研究を積み上げた令和5年度から6年度までの取組からは、以下の点を明らかにすることができた。

1. 子どもたちが学びに「手応え」を感じられるようにするための深い教材理解と具体的な目標の設定
2. 対象との関わりを軸とした連続性・発展性のある活動構成
3. 子どもたちの追究の中で、単元を通してじっくりと醸成される、違和感や疑問としての「問い合わせ」の想定
4. 「学びを捉え直す」という意識のもとでの、振り返りによる気付きや思考の質的な高まり

<sup>5</sup> 「主体的に学習に取り組む態度」に係る各教科等の評価の観点の趣旨に照らして、「①：知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとしている側面」と「②：①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面」という二つの側面を評価することが求められるとされた。

また、より一層の手応えのある学びの充実のための課題として、以下のような点が挙がった。

【総合的な学習の時間 6年「なんだろう、なんだろう<キャリア>の実践から】

- ・資質・能力の具体化やA3版の一覧表は、評価と指導を常態化するうえで、大変役に立ったと捉えられる半面、次（の追究）が更新されていくごとに、より具体化されていくように作成していかなければならない。そうすることで初めて効果的な学習評価ができ、次に向けた指導に生かしていく。

【生活科 2年「幌西スマイルたんけんたい」の実践から】

- ・評価規準を具体化し設定することで見取りやすくなった、本時から単元レベルの子どもも一人一人の変容を、子ども同士で価値付けることにより、さらに個々が自覚化できる場合もある。
- ・活動中に表現することでの「捉え直し」全体交流を通しての「捉え直し」学習を振り返ることでの「捉え直し」…様々な種類が考えられる。

生活科、総合的な学習の時間の2つの実践から共通して見えてきたことは、子どもの学びの状態を適切に評価し、その評価を基に、目標や評価規準をより具体化して指導に生かしていくことの重要性である。

また、生活科では「一人一人の気付きをみんなで高めていくこと」、総合的な学習の時間では「共に学ぶことが個人の学習の質を高め、同時に学習の質も高めていく」という学習指導要領上の言葉からも、本研究における「他者との対話や協働」の重要性も改めて認識することができる。

そして、子どもが活動そのものを振り返り、気付きや思考に結び付けて客観的に把握し、捉え直すこと（メタ認知）は、子どもが学びの手応えを自覚化していくために有効な手立てであると推察される。

子どもの感じている手応えをつぶさに捉え、子どもの活動過程応じて手応えをより一層感じられるように指導を改善し続けていくことが、学びを実感することに寄与するだろう。そして、子どもたちは「手応え」を自己の生き方に投影し、未来を拓いていくと考える。

そこで、令和7年度の研究副題を

＜研究副題＞

「手応え」でつなぎ、「捉え直し」で深まる学び

と設定し、その具現化を目指す。

### 3. 研究内容について

前次研究の「手応えのある学びの実現」においては、子どもの学びを「手応え」というフィルターで捉え直した生活科・総合的な学習の時間の授業の在り方について検討してきた。

そこで明らかになったのは、「評価を指導に生かす」という視点からの授業改善が、更なる「手応え」の深化・変容につながることである。

そのためにはまず、具体的な目標の設定と、それを基にした評価規準の具体化が欠かせない。活動に向かう具体的な子どもの姿をイメージし、目標に対する評価規準を設定する際には、その単元で味わわせたい手応えと育成すべき資質・能力の整合性を図ることが極めて重要となる。同時に、評価規準を子どもの活動実態に合わせて再検討していくことも重要となろう。当初想定していた評価規準を、形成的評価の視点で子どもの実態を適切に見極めながら柔軟かつ弾力的に扱っていくことが、結果的に子どもの手応えをより充実させていくことになる。

そのためには、評価、つまり子どもの学びを「見とる」ということの精度をこれまで以上に高め、評価を生かした指導の改善を図る必要がある。

ここでいう「見とり」の精度を高めるとは、子どもの学びを子どもの目線で捉えることに徹する、ということに他ならない。具体的には、学習対象となる「材」や、「材」との出会いから生まれる「追究の道筋」、その過程で生まれる子どもにとっての「問い合わせ」などの要素について、とことん子ども目線で想定して学習を構成することが、私たちの見取りの質を高めていくことになる。

子ども視点に立ち、「材」「活動構成」「問い合わせの所在」について真摯に向き合いながら学習を構成することが、「手応え」でつながる学びのイメージを浮き彫りにしていくのである。

最後に、学びの捉え直しの在り方についても検討を重ねていく。本次研究においては、少なくとも以下の5点が重要であると位置付ける。

1. 「いつ」…学習活動におけるどの場面の、どのタイミングで
2. 「何を」…学習活動における、どんな内容を
3. 「誰と」…教師の指導を含む、多様な他者との協働
4. 「どのように」…振り返りを始めとした、捉え直しの方法
5. 「何のために」…捉え直しの価値を子ども自身が自覚化する、目的

学びを捉え直すことがより手応えの醸成につながるのかを明らかにし、学びにおける手応えのさらなる深化・変容について考察していく。そのため、本研究における活動構成と評価の在り方を一覧にした『活動構成・評価計画一覧表（A3資料）』と、捉え直しにおける様々な可能性との関連を図っていく。そうすることで、より手応えの連續性・発展性を捉えられるようにするとともに、それぞれの資質・能力のどの観点との関係性が見られるか、といった他の実践にも生かせるように一般化を図っていきたい。

なお、今年度の研究内容については、生活科・総合的な学習の時間とともに同じ視点として設定し、学年の実態に応じた幅広い手だての在り方を模索し、整理することとする。

研究内容①

- ・具体化した目標を基にした評価規準の弾力的活用
- ・「手応え」と「捉え直し」の視点からの教材分析と活動の構成

研究内容②

- ・「手応え」につながる問い合わせの在り方
- ・「手応え」を深化・変容させる捉え直しの考察

道 研究主題 自ら学びの世界を拓げ よりよい自分を創る子ども

市 研究主題 自分の学びを実感し、未来を拓く子どもの育成

市 研究副主題 「手応え」でつなぎ、「捉え直し」で深まる学び

